

古代秦（波多）氏と大野牧

謎を秘めた若澤寺を探る

執筆 百瀬光信

平成二十五年六月

目次

序文	一		
一. 若澤寺成立の真相を解明する	二		
1 行基と田村麿の開基縁起			
2 元寺場発掘調査で平安末期創設に			
二. 山城国の秦氏大野牧を開く	三		
1 初期牧の管理は上海渡			
2 銅造弥勒菩薩と秦氏の関連			
3 地名から「牧」を推理する			
三. 応神朝（五世紀初）に秦氏渡来	五		
1 波多氏と百瀬氏渡来説			
2 波多腰（輿）氏の巨勢説は疑問			
3 秦氏分流が古畑（降旗）氏に			
四. 藤原氏と重縁 秦氏の宗家	七		
五. 貞観寺領の「大野荘」が成立	八		
六. 大井堰は秦氏が企て国営で開発	八		
七. 白山権現は水 <small>みくま</small> 分り信仰	九		
八. 源姓に変わった秦（波多）氏	十		
1 鎌倉御家人の波田判官代跡			
2 源盛国（畠判官代）が青木原に城館			
3 内田牧と埴原の新補地頭になる			
4 西と東に所領を得て富豪に			
九. 『筑摩安曇古城開記』より	十二		
1 村上一門の戸隠寺別当栗田氏			
2 神仏習合の戸隠修験場			
十. 畑時能が移り住んだ伝説	十四		
十一. 波田氏らが小笠原長秀方に	十四		
1 百瀬豊前が渕東嶋開拓			
2 波多腰清勝が牛伏寺の修理			
3 八間長者は内田に水田開く			
十二. 結城陣番帳の波多殿	十六		
十三. 内田埴原の領主交代	十六		
十四. 若澤寺施主に平朝臣六翁盛高	十七		

十五 櫛木家家臣団が西光寺檀家に

十七

二十一

若澤寺の丁石と施主名

二六

- 1 上波田へ熊野権現を勧請
- 2 百瀬長昭が中上手に梓川寺

二十二

波田下郷の諏訪神社と春日氏

二七

十六 元寺場は鎌倉時代墓地に

十九

二十三

信濃日光を仕上げた栄豊

二八

- 1 室町期に白山修験道さかん
- 2 江戸時代まで五間堂残る
- 3 水沢大天狗は山伏行者
- 4 加賀白山の信仰とは

十七 戦国時代に荒廃した若澤寺

二二

二十四

廃仏毀釈で幻の寺院に

三〇

- 1 波田殿の敗北で無施主に
- 2 武田勝頼の寺領寄進
- 3 元水澤からつきがね堂へ引く
- 4 小笠原貞慶の寺領寄進

十八 西光寺が若澤寺預けに

二三

二十五

若澤寺の旧檀家名前

三一

十九 新義真言の智積院末に

二三

- 1 「長祿二年に山奥から下りる」は誤り
- 2 住職栄運の英知と人徳

二十 常和泉守の菩提寺は盛泉寺

二五

1 盛泉寺位牌堂に開山の氏人

序文

この冊子は、平成二十三年十二月十五日に、波田公民館の歴史講座で講義した「謎を秘めた若澤寺を探る」という草稿に加筆したものです。若澤寺は古代中世から近世までの波田地域の歴史の原点と言えます。松本平の歴史の流れと若澤寺とのかかわりについて、筆者独自の史観による解釈を混じえ、地域にある資料を主に用いて講演した内容である

本冊子の上梓には、波多腰英文氏に、印字化をお願いし、立派に仕上げていただき、深謝申し上げます。

執筆者 百瀬光信

一、若澤寺成立の真相を解明する

今から百四十年前の明治初年に「はいぶつきしゃく廃仏毀釈」ですべて取り壊され

た、上波田水沢の信濃日光「じげんざんにやくたくし慈眼山若澤寺」と、その末寺西光寺、

下波田法久寺を含む一山の古代中世以来の謎の部分について『若澤寺文献資料集』を読み解きつつ、これまでにお話してきた内容とは、

角度を変えた方向から、光を当てて、若澤寺の歴史事実を究めつつ、

地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

1 行基と田村麿の開基縁起

世に流布している「若澤寺縁起伝説」は、江戸の文人十辺舎一九

が、文政二年（一八一九）春発行の絵草紙『信州水澤觀音利益・りやくぞうし雑食

ほしゆらい橋由来』に「天平勝宝年中（七五〇〜七五六）行基菩薩の開基にし

て、大同年間（八〇六〜八〇九）田村麿の中興とかや」と書き、全

国的に知られたが、元文二年（一七二七）に地元上波田村庄屋、平

林弥五右衛門が書き留めた『水沢若澤寺不動院之記録』には「本尊

正（聖）觀音行基菩薩御作大堂二御座候 中興坂上田村丸利仁公 鬼

神退治ノ御願成就 大同元年（八〇六）丙戌 白山ノ下寺場へ御移

シ 堂御建立ノ由シ 田村公御守本尊ノ千手觀音御安置 夫レヨリ

以来 両觀世音ニテ本堂ノ御本尊ナリ 鬼神飛行ノ劔段々ニ壞レ

什宝ニテ箱入り宮殿ノ内ニ之レ有リ候 古来ノ記録ハ隆憲ト申ス住

持ノ代焼失・・・云々」とあります。

▼五世紀初めの三韓よりの渡来氏族の末裔で、平安時代に、民衆か

ら人気の高かった、偉人の行基と田村麿を開基者になぞら擬えた。同じ渡

来人の子孫で、若澤寺を元寺場に開基した大野牧の秦氏はたうじが縁起とし

て流布させたものとみられます。

2 元寺場発掘調査で平安末期創設に

平成十一年より行った『元寺場遺跡調査』で判った、標高千二百

五十メートルの水沢山元寺場の実態は、八世紀の行基・九世紀の田

村麿の開基伝説よりは、二五〇年程後の平安後期（十世紀末〜十一

世紀初頭）の山岳寺院であった。元寺場からの出土遺物は、はじ土師の

灯明皿つみと坏つぎ・酒杯すえ・須惠りよくゆうとうき・緑釉陶器ろくろとうき・裏側に「安養」の墨書きのある灰釉陶器かいゆうとうきの皿や・小椀・硯・中国宋銭の元豊通宝（一〇七八）・嘉祐元宝（一一〇六五）のほか羽釜はがまや甕かめなどが、平安時代の物であった。『調査報告書』

二 山城国の秦氏大野牧開く

若澤寺の住持隆仁記に、正保二年（一六四五）の火災（回録）の時に持ち出した霊仏の内に「春日作 宇賀神うかのかみ」がみられる。

京都伏見の稻荷大社の祭神は「倉稻御魂神うかのみたまのかみ」だが、若澤寺には、昔より稻荷神をまつっていた。『山城国風土記』に「伏見稻荷大社は、秦公伊呂貝はたのきみいろくが、和銅四年（七一）から祭つる」とある。五穀豊穰と稲作の守り神で、秦氏の氏神として信仰していた。

平安初期に京都から波田へ入り、大野御牧おののみまきを開いた秦氏の、最初の居住地上海渡かみがいとの水沢川添いに稻荷神社を祭った。

秦氏は平安後期に元寺場へ、牧場の牛馬守護仏の水沢観世音を安置する寺を建て、そこに稻荷社を祭った。若澤寺の廃仏毀釈で競売

された稻荷廟は、山形村上竹田の穴観音にある。

▼太秦うづまさに蚕かいこの社やしらがある。秦氏は織物の新技術と養蚕を持ってきた。波田には「蚕玉祭こだまつり」が多い。

1 初期牧の管理地は上海渡

最初の大野御牧冬の繫飼地つなぎかいちは、梓川右岸段丘の車坂原、三ツ岩、淵東嶋らしい。牧長館やかたや牧人官舎かみがいとは、神垣内（上海渡）の水沢川沿いにあり、今も周辺から土師片はじへん、灰釉陶片かいゆうとうへん、須惠器片すえきへんが見つかる。水沢川の東には波田で最古という「水澤田、白川田、矢倉田」がある。

平安初期ころは波田、山形、安曇下区は草原と疎林の点在する無地帯であった。『波多村誌』（明治九年）には「牧場くるまさかまきⅡ群馬栄牧・三ツ岩牧・兎淵ノ牧とえんのまき」がみられる。この三牧の扇の要かなめの地が上海渡地区に当たる。

▼『乗鞍の自然と文化』(二志茂樹・小穴芳実共著)には「延喜式に見える、御牧大野牧は波田、安曇、山形と推定。その根拠は『波多村誌』にある三牧の伝説や『仁和寺文書』にみえる、筑摩郡大野荘がある点」をあげている。

▼地方史家故栗岩英治氏は『信濃』二巻九号で「扶桑略記に引用の古善光寺縁起にも、はたのかわかつ秦河勝の名が現れている。けれども堂々として秦氏居住の跡を名乗って居るものは、波田村の如きは、けだし日本中にも少なからう。」とのべています。

2 銅造弥勒菩薩と秦氏の関連

明治六年旧若澤寺廃寺の際、中波田盛泉寺が預かった『銅造弥勒菩薩半跏思惟像』(奈良時代末作)Ⅱ県宝うずまさがあります。京都の太秦広隆寺には、国宝『木造高冠弥勒菩薩半跏思惟像』が安置され、同像は飛鳥時代(六世紀)に聖徳太子に仕えた、はたかわかつ秦河勝が太子から預かり出身の太秦うずまさへ蜂岡寺を建て、秦一族の氏寺として、弥勒仏を信仰

していた。

若澤寺旧蔵の弥勒仏は像高二二センチメートルの小金銅仏。京都で鑄造されて念持仏として、秦氏が所持し信仰、大野牧へも奉持して参拝したものとみられる。

3 地名から「牧」を推理する

「延暦十六年(七九七)信濃牧監に初めて公麻田くまいでん(職田)を給う」(類聚三代格)。この頃太秦より秦氏が派遣されて、波田に大野牧が新設されたらしい。

▼大野牧が推定される地名

「安曇下区しもく」大野田・稲核いなこき(馬背口・かいと)
「波田地区」群馬栄牧くるまざかまき(車坂原・馬放し場・馬橋下・馬搦東)うまつきがし、三ツ岩牧(牧ノ内・鷺洞・鳴音原・大野田夏道原・追)おい
平・奥殿原・まやの上だいら
兔淵ノ牧えんどうじま(淵東嶋・上河原・棒小屋マチ・くもげ)かみがわら

堀ノ内・横町 (松原堀ノ内・馬場・蓮台場)

鼠海渡・越 (腰・西久根)

(中下原・真駒ヶ原・中沢・神ノ洞・龍胆)

清水・栗谷洞・牧寄・留林・牛久保・

荒倉沢・水上、平林)

原村・百々目木 (留め木)

(出口・沢尻・上木戸・中原・北原・押出)

原・狩野里 (金折)・見附久保・松原・

御殿場・中巾)

〔和田〕

(三間沢左岸遺跡)

〔山形村〕 (唐沢川・三間 (御馬) 沢川・駒見沢・

ませ口・まやの尻・乗越し・野尻・牛道)

▼水沢山若澤寺の末寺に竹田明清寺、小坂定楽寺があつた。真言宗

で大野牧の祈願寺。清水寺も牧寺かと思われる。

三 応神朝 (五世紀始) に秦氏渡来

『新撰姓氏録』(八一四) 左京諸蕃条に、「秦造秦始皇帝五世

の孫融通王の後也」とある。

『地名苗字の起源九九の謎』(鈴木武樹著)「秦氏の本流は漢氏と

同じく、五世紀初頭に百濟から渡来したとされる。王族「弓月ノ君」

の末裔だが、のちの勢力関係からみると、この一族は、むしろ新羅だ

とした方がよいような様相を呈している。ハタ氏は殖産財政など、

実務面でその実力を發揮した。そしてオオハツセ ワカタケ (雄略

天皇) の五世紀後半には、九十二部一万八千六百七十人を数え、ア

メクニオシハラキ ヒロニハ (欽明天皇 六世紀の治世には、秦人の

戸数は、総じて七千五十三戸であつたといわれる。

ハタの地名を紹介すると、北九州から四国、本州の東北まで、全

国四十二国に、秦氏の足跡が残る。信濃には波多郷と治田神社が見

られており、氏人中の波多腰は秦氏の系統とされています。

1 波多氏と百瀬氏の渡来人説

昭和八年発行の『旧松本市史』によると「百瀬と波多は百瀬は地名として寿村ことせむらにあり、姓氏としては東筑摩郡中に最も多く、百瀬くだらの転字てんじとの説もある。波多は百済の帰化族なり、波多村に百瀬姓多し。彼等は千四、五百年前の渡来人なり。大きく言えば、先住土着日本人は、歴史以前の古き移住者、この新しき移住者は、先住民に比べ、文化の程度高く、地方開発に資したること多からん」と書いている。

昭和六十三年（一九八八）の松本市と波田町の百瀬氏は一四九〇世帯あり域内で一位の苗字。

2 波多腰（輿）氏の巨勢氏説は疑問

腰（輿）氏の秦（波多）氏説は解るが、昭和四十八年発行の『松本市・塩尻市・東筑摩郡誌』（歴史上）の説明には疑問点があり信じ難い。

「地頭波多氏

（前文を略す）波多と波多腰の二つは、同じものと考えてよいようである。大和（奈良県）から移った、古代氏族の巨勢こせうじ氏の一族が、この地方で大御牧など牧場経営にあたり、この一族が波多氏を称し、波多腰（波多の巨勢こせ）とも言ったのである。波多腰は波多の巨勢であつて、本来的な呼び方と言える。これがいつの頃か源みなもとを称し、鎌倉時代の末から、重久、信盛、清勝がそれぞれ源氏を称している。」

古代大和やまとの巨勢氏と秦氏系の波多腰（輿）氏とを、同一視しているがこれは誤りである。

巨勢こせうじ氏は武内宿禰たけのうぢすくねの子、許勢こせおがら小柄に始まり、末孫に左大臣・中納言 天平三年（七三二）の巨勢またえ又兄と延暦三年（七八四）正五位上 巨勢苗磨朝臣なえまろあそんは信濃守となるが、両者遥任ようじんで国府へ在序せず、大御牧おほみまき経営の痕跡はない。

承久の乱（一二二二）の後、内田牧埴原に新補地頭となった波田判官代跡は、村上系源盛国の子孫

牛伏寺修理銘（二四一八）の波多腰清勝は波多（秦）氏の一族で

腰(輿)と称し内田牧長に派遣された。本家は波田の越(腰)村や西久根に居た。一部の輿氏は大井堰(和田堰)添いの新村根石、下和田、波田上嶋で堰の管理役だったらしい。

3 秦氏分流が古畑(降旗)氏に

上波田と横町・堀ノ内に古畑(古波田) 姓が二〇軒ある。この地区は、上海渡から上ノ段へ放牧地を移動した大野牧の牧長、書生、

馬医、馬相観(伯楽)、調教騎師、馬具師(鞍造り)、鍛冶、番匠(大工)、木挽、牧田農夫、牧夫(馬飼人)、出納官などが集住したらしい。

上波田横町の東方に松原(御朝廷林、松原堀ノ内、馬場、蓮台場)馬の繕い場などの名がある。まさに勅旨牧の跡にふさわしい場所。梓川右岸段丘の上海渡面、押出面、森口面と共に波田面は唐沢川、荒倉沢、中沢の形成した扇状地が大野牧である。

騎馬民族の末裔、京都の秦氏は官牧、大野牧を開き、院政時代には村上系源氏の家系に入り、畠(波多)判官代跡と名乗った。

秦族の一部は、左岸梓川村へ古幡牧を開き水田を作った。また秦一族からは古畑(畠)氏を名乗って、中信各地へ分散している。

昭和六十三年の中信の古畑氏五百二十五世帯、古幡氏八十五世帯降旗(籬)氏五百十世帯。

波田、安曇、奈川から木曾、大北など中信に七百五十世帯ある輿原姓にも大野牧人説がある。

四 藤原氏と重縁 秦氏の宗家

『邪馬台国は秦族に征服された』(安藤輝国著)によれば、「秦族系部民の統合による秦氏が、古代政治の上で、もつとも大きな役割を果たしたのは、奈良から平安期にかけてであった。」としている。その背景には、天皇の外戚となった、藤原氏との結びつきがおおきく作用しているという。

桓武天皇に長岡京への遷都を推進した藤原種継の母は、たねつぐ 図書頭・かすえのかみはたとももと 主計頭秦朝元の娘。種継の妻も秦氏である。平安京の造宮長官藤原おぐるまろ 小黒麿の妻は秦島麿の娘が嫁いで、その子藤原葛野麿(遣唐使)の

妻も秦氏だった。

長岡京造宮の功労者、秦忌寸足長と太秦公宅守は従五位上に

叙せられている。秦氏は奈良から、自分の拠点の京都へ遷都する手

助けをしています。秦氏は平安京のモデルとして、祖先 秦始皇帝

の都だった西安を模し、技能と財力と労力動員で貢献したといわれ

る。

五 貞観寺領の「大野荘」が成立

京都仁和寺文書の『貞観寺領田地目録』（貞観十四年（八七二））

によると「筑摩郡大野荘百二町歩二反（熟田十町三反五十歩、荒十

一町二反五十歩、未開八十町六反百五十歩）を故右大臣藤原良相名

で貞観寺領へ施入。」とある。

この時、藤原氏の長者良房は、清和天皇の外祖父で摂政太政大臣

となり、空海の高弟真雅と図り、勅願寺とし貞観寺を創立し、弟良

相の遺領の全国十カ所の荘園と共に寄進して、不輸（免税）と不入

（国司不介入）権を得た。

これは、大野牧長の秦氏が、牧内に開田して、親戚の藤原氏に寄

進し、荘園に立券した上で、更に勅願寺に施入し、根本開発者の秦

氏は、荘園下司（荘司）職を得たらしい。

六 大井堰は秦氏が企て国営で開発

『和名抄』（九三七）の筑摩郡六郷に良田、崇賀、辛犬、錦服、

山家、大井がのり、すべて国衙領。大井郷は、国衙が梓川から大堰

で取水灌漑し郷が開けた。

京都嵐山の渡月橋上流に、保津川の堰堤がある。大井（堰）川

といい、水は用水路から嵯峨野の水田へ灌漑している。

▼考古学者 森浩一氏の論文に「葛野大堰は、中国で秦始皇帝の二

代前の王が、四川省成都郊外に設置した、都江堰と同様の技法で、

秦氏が保津川へ作っている。」と書いています。

▼信濃国司一覽表（旧松本市史・北安曇郡誌・松塩筑郡市誌）にみ

られる、平安後期の延喜四年(九一四)に信濃小目秦岑範・権しようさかんはたみねのり こんしようさかんとすのはら小目伴春原の名があり、長徳元年(九九五)権小椽秦員友がこんしようじょうはたがすと在る。

寛徳元年(一〇四四)に信濃椽秦今武の名が載る。じようはたいまたけ

平安時代の守と介は遙任で、国府に赴かず、国務は在庁官人任かみ すけ しようにん おもむせであつたから、椽や目が実務を行つた。じよう さかん

この頃、国府で在庁の豪族だつた秦氏は、伝統の工法で筑摩郡司

の主帳 辛からいぬかいおとえ犬甘乙枝やその弟の秋子あきねら有力者と図り、国衙こくがの雑徭ぞうよう

を使つて、公民に年六〇日の使役を課して、梓川上流の牧ノ内地域

に止水堰堤せぎていを作り、また大井堰用水路を掘削して、下流の新村、和

田、神林、島立、島内に灌漑し水田を拓いた。こうした国衙直轄事こくが

業で成立させたのが前記の『和名抄』(九三七)の大井郷(公領)で

ある。

波田下ノ段の一五〇町歩水田耕作者は、永世に梓川水利組合や公署

に対し水利費、工事費を一切負担しない慣行ができたのは、水路

敷地を無代提供のためという。

七 白山権現は水みくま分り信仰

平安末に、筑摩郡河西部へ公領の「大井郷」が成立。稲作水田農業地帯の郷村であるから、農民にとつて天候が順調で、田用水が行

き渡るよう、神仏に祈願する気持ちから「水みくま分り信仰」が起こる。

松本平から西山に目立つ、霊峰は乗鞍岳と手前の白山(標高一三八六m)である。

里に近い白山下の元寺場の「峯白山権現堂」に十一面観音が安置され、また戸隠信仰の聖観音が併立し、山頂しらやまきくりひめのみことに白山菊理姫命の社が祭られた。

水沢山に白山権現の神仏習合寺院が成立した要因は大井郷農家の

「雨乞い祈願」にあつた。

▼また仏法には「六道輪廻りんね」の法則が説かれ、牛馬は前世の罪業で死後に、父母が畜生道に落ち、その生まれ変わりの姿だという。牧

寺は、馬は観世音菩薩に、牛は大日如来えんこうに回向祈願することで、来世は、天上界に生まれ変わることを祈願するための寺院であるとい

う。

若澤寺には古くから、馬飼小屋があり、これは田村將軍の乗馬を納めたとも言われている。

八 源姓に変わった秦（波多）氏

平安中期の二百一十年間続いた藤原氏の摂関政治が、白河上皇（二〇八六）より院政に変わった。秦氏はたうじは長い藤原氏との絆きずなから脱却。大野荘司から畠郷の荘官になった。

『尊卑分脈系図』そんびぶんみやくけいずに清和源氏源頼清流の源為国（村上崇徳院判官代）の舎弟に、源盛国の名があるが、この人が「畠判官代ト号ス」はたほうがんたいとあるのは、畠判官の秦氏が源氏御曹司おんせうしの盛国を養子などで、家系に迎えたことを物語っています。

▼清和源氏研究者の奥富敬之氏は『歴史読本誌』（昭和六二年十月発行）で次のように述べている。「為国が頼清流の嫡系をつぎ、信濃国

村上御厨みくりやに下って、村上判官代と称した。中世信州に武名をとどろ

かせた村上党の祖である。この為国は少納言入道藤原信西（通憲）

の娘を妻にして、信国、泰遠、安信らの子を儲けた。信西入道は、

保元元年（一一五六）の乱後から平治元年（一一五九）の乱のとき

まで、わずかな期間ではあったが、京都政権における政務の実権を

にぎった人物である。」とあり「源頼清流の代表姓氏（信濃国）二十

二氏の内へ畠氏」はたうじを入れている。

なお、信西入道の妻は、紀伊ノ二位と言ひ、後白河天皇の乳母で

あるから、村上為国の妻は、後白河天皇と「乳兄弟」という強い縁

故があり、為国の子や兄弟は官廷に仕官して、然るべき所領を与え

られている。舎弟の源盛国も院判官代になっていたため、院庁や武

家との結びつきを求めていた。豪族の秦氏（畠郷荘官）は源盛国を

家系に迎えたことで、一族の全員が、南信濃源氏に入っています。

この時代、波多神社は上波田字青木原に祀られ、康治二年（一一四

三）紀州牟婁郡有馬むろぐんより熊野権現勧請し、合祀したと伝えられる。

（森芳夫前宮司記録）

1 鎌倉御家人の波田判官代跡

畠郷の源盛国一門は、武士に転身した。源頼朝が一一九二年征夷大將軍となり、鎌倉に幕府を開くと、上洛の随兵や社寺への参拝の供に、村上一族から右馬助経業、左衛門尉頼時、判官代義国、左馬助信国、余二判官仲国名が『吾妻鏡』あずまかがみにみえ、彼らは御家人になっている。

畠判官代盛国も村上判官代基国らと、南信村上党の一員で幕府の御家人になった。

鎌倉中期の建治元年（一二七五）『六条八幡宮造管注文』という文書には、信濃御家人三十二名の名前があり、その内に「波多判官代跡 四貫」とある。次いで嘉暦四年（一二三九）の『諏訪上宮祭行事結番関東下知次第』に「右頭内田牧埴原地頭波田判官代跡」が載っています。

嘉暦四年（一二三九）の波田氏は「上波田仁王尊体内銘の元享二年（一二三二）大檀那源重久」とは七年差なので、同一人と見られ、波田を本拠として、東山にも所領を持っていた。

2 源盛国（畠判官代）が青木原に城館

畠郷司の源盛国は、城館を上波田の要害である舌状台地の青木原に構え、おめ沢の東側へ氏寺の西光寺を建立。奥ノ院は居館から一八丁水沢谷へ入ったところへ、慈眼山若澤寺を建てている。里の坊栗田西光寺の仁王門本尊の金剛力士像二体は、鎌倉末に源重久が善光寺仏師如海に作らせたとあります。（県宝）

このほか若澤寺の仏像には、現在中波田盛泉寺が保管の、鎌倉時代作『木造不動明王立像』（松本市文化財）、同じく県宝の『銅造薬師如来坐像御正体（懸仏）残闕』こうはいは後背の円鏡を欠いているが、本来はご神体を表す円鏡に取り付けられて、寺社の壁に掛けて参拝していた。神仏習合の仏で鎌倉後期作。

このように源姓波多氏は、若澤寺及び西光寺など一山の造営を成し遂げていた。

3 内田牧と埴原の新補地頭になる

承久の乱（一二三二）は鎌倉の源氏三代の將軍が断絶したことで

直後に、後鳥羽上皇が企てた討幕計画は北条氏が動員した二十万の幕府軍により鎮圧された。上皇は在京の武士を頼りに挙兵したが、執権北条義時と尼将軍政子により破られ、後鳥羽上皇は隠岐島へ流され、順徳上皇と土御門上皇も配流されており、府中では捧まきげノ荘のしょうの平賀（大内）惟信が後鳥羽院方で所領を失い、没落後に捧ノ荘半分は、陸奥左近太夫将監（北条基時）領に変わったことが嘉暦四年（一二三二）の関東下知状によって知れる。

▼波多判官代跡の源氏が幕府より新補された内田牧埴原の地頭職は大内惟信の旧領らしい。

4 西と東に所領を得て富豪に

源姓波多氏は東山に新領地を得て、富豪となり、水沢一山の五院を建立。牛伏寺にも寄進している。

南北朝の元中四年（一二三七）に源豊重が、上波田の西光寺の地藏堂を建立と『西光寺絵図』にあります。同年大檀那源豊重と文阿

源信盛の父子連名で、東山牛伏寺大門の小池郷地藏堂に『木造地藏菩薩半跏像』を沙弥しゃみけんあ見阿を取り持ち旦那として寄進しています。

南北朝までの源姓波多氏は、東山の内田埴原と西の波多の両地を所領し富裕で、水沢一山だけでなく、牛伏寺の仏像にまで施主となつている。

九 『筑摩安曇古城開記』より

江戸時代の享保（一七一六）から安永（一七八〇）ごろ若澤寺の僧侶が筆記したらしい『筑摩安曇古城開記』という書物に、古代中世の水沢寺三院の様子が描かれています。（前段に坂上田村麿が中房の八面大王を討ち平らげた記事が掲載されている）

「田村將軍は、京都へ帰り西光寺へ別当職を下向させた、天台の碩学にして伝教大師の遺身なり。

さて水沢西光寺は、寺領今の世にも有らば、山里かけて千石余もあるべき寺とかや、よりに奥の院を若澤寺と称し、中院は西光寺、里ノ坊を栗田西光寺と号す。永徳の頃（一二三二）まで七堂の寺と

かや。二ヶ寺ながら皆戸隠の支配とかくしなるが、ある時争論のことありて、天台と真言とに別れたりき。』とあります。

『西光寺絵図』(上波田阿弥陀堂蔵)にも「西光寺伝に曰く、本寺は若澤寺の塔頭たつちゆうなりしかど、弘和永徳のころ、天台真言宗論にて、七堂は別れ栗田西光寺末寺たり。」と書き込まれ、古い時代の様子がわかります。

▼中院の所在地は明確でないが「光明山の下」即現寺が江戸初期に安養寺へ移ったとされるので、山城の近くにあつた寺と思われる。

1 村上一門の戸隠寺別当栗田氏

北信の戸隠寺別当、栗田寛覚は村上為国の子である。為国舎弟の源盛国はたは畠(秦)氏の家督を継ぎ、平安末に、水沢山中へ祈願寺若澤寺を創設。氏寺の別当西光寺に一門の栗田氏から、村上左京亮重信II(周防守)を迎えた。神主森家や、古城の百瀬右近家、上波田西村の村上家の祖。『森氏家系図』ほか

2 神仏習合の戸隠修験場

若澤寺や西光寺を建立すると、村上一族の畠盛国は、一門の戸隠寺より別当を呼んだ。北信の戸隠は、平安時代から、神仏習合による本地垂迹説の修験道の本山で、奥社、中社、里宮宝光社の三院で戸隠二所権現と呼ぶ。寺別当は顕光寺の栗田法印が支配しており、戸隠一山は末寺を合わせ、三千坊と言われ、天台、真言の顕密両宗による、信州修験の本山だったが、室町時代に宗論で分裂し衰退した。

本地垂迹説では、戸隠は天手力雄命あめのたぢからをのみことの本地仏は聖観音しょうかんのんといふ。戸隠の地主神は九頭竜神くずりゅうじんで、その本地仏は弁財天だと言ひ、水と農作を司さどる仏と言われる。

若澤寺の古い什物に「聖観音像と弁財天像」が見られるのは、江戸初期まで戸隠信仰の形が残り、それが弁財天の祠になった。善女龍王の祠は弘法大師の「雨乞い」の祈祷で招来された、雨降らし龍王で知られる。

十 畑時能に移り住んだ伝説

南北朝時代の軍記『太平記』に南朝方の忠臣新田義貞の四天王畑六郎左衛門時能は、三井寺合戦や北陸各地で北朝方を破り、その武勇は世に鳴る。武蔵の出身という。

新田正伝記に「畑時能祖先は秦始皇帝」とある。大秦から波田の大野牧へ来た、牧人の秦氏と同祖という。

『太平記』は畑時能について「信濃の国に移住して、生涯山野江海の猟漁を業とし（中略）犬獅子と名つきたる。不思議の犬一匹あり」としています。『波多村誌』には「畑時能は東国より姥と共に此地へ来たり住す、人となり才力智謀衆にこえ、かつ仁恵深く、村民を撫育す。衆人服従し、畑殿と尊敬す。建武のはじめ、官軍新田氏に属し、義貞没後尚勇威を逞しふし、越前鷹巣城に籠り、歴年敵を悩まし討死す。と古老の伝説なり。」うはたき「姥滝 高さ一丈八尺、源を水澤山に発し、字神代石に落つ（中略）新田義貞没後、時能討死せしを、姥聞いて、悲歎の余り此の滝壺へ身を投じて死す。よって姥ヶ滝と号す。と古老の伝説なり」

十一 波田氏らが小笠原長秀方に

応永七年（二四〇〇）北信で起こった惣国一揆を「大塔合戦」という。將軍足利義満から信濃守護職の御教書を受けた、小笠原長秀に對し、大文字一揆ははじめ、国人武将らは、村上満信を盟主に約四千騎が結集、千曲川原で八百騎の守護方を破った。後尾の守護軍三百騎は大塔古城で全滅。小笠原長秀は辛らくも京へ逃れた。幕府は国人等の鎮静化のため、守護を代えた。最初の長秀国入りの美々しい行列には、府中から波田小次郎、百瀬、興、住吉、浅野等の名が見られる。波田氏らは、長秀の本領の伊那郡伊賀良荘や伊那春近の武士と、行動を共にしていたのである。

1 百瀬豊前が洩東嶋開拓

百瀬氏は、波多判官代跡一族の南信源氏、鎌倉時代には筑摩郡百瀬郷を受領していた。波多三郎兵衛源長親は、宗家の知久信濃守祐超から推挙されて、後醍醐天皇の弓馬札式師範で、信濃守護になった、小笠原貞宗の指揮下に入り、建武年中（二三三四〜二三三七）

府中の、飛驒口押さえのため、総領の波多長盛は、一門の武士を率いて、波田の古城に陣立てした。この時北朝から源長盛は、波多勘解由之介を任命された。同名武士は波多左衛門、同右衛門、同兵衛、同右近、同左近らと言われる。南北朝の対立は六〇年続き、明徳三年（一二三九二）に南北合一し終戦。それぞれの武士団は本貫地へ帰ったが、二代長秀の子である、豊前守源長吉は、百瀬郷へ帰らず、昔祖先が住んだ、波多本郷堀ノ内の館へ住み、苗字を百瀬氏に改め、守護小笠原氏経由で、足利幕府へ、旧兎刈牧跡の、荒れ地開発願書を提出、応永三年（一二三九六）より渚東嶋の水田化を着手し、梓川から、嶋堰を開き完成させた。先祖からの、水利の伝統が生かされた。

2 波多腰清勝が牛伏寺の修理

秦（波多）氏の末裔という、波多腰（興）氏は、古くより越（腰）村や西久根、新村と三溝堺の根石（巻ツ立石）などに住んだらしい。鎌倉御家人となった波多判官代跡の源氏は幕府から、内田牧埴原地頭を新補され、波多（秦）氏は内田牧へは経験のある、波多一門

の興氏（越村）を派遣支配させた。埴原牧は早く水田化され退化していたが、南内、北内の両牧はまだ放牧できた。

応永二十五年（二四一九）と、二十八年（二四二二）に内田の牛伏寺釈迦如来像と大威徳明王騎牛像や堂を修理した、波多腰大和守清勝と右馬亮信源（しんげん）がいる。また応永二十九年（二四三二）には、牛伏寺へ奪衣婆像（県宝）を造立したのも清勝と小池殿左馬亮信道で両内田牧の富による寄進であろう。

3 八間長者は内田に水田開く

室町時代中期には、旧左馬寮領の官牧に周辺の豪族や農民が、開墾を始め、牧場経営は困難になったらしい。それは、次の資料で判る。「波多腰清勝は、南内田の牧人らを、ひきいて、塩沢川の水を田組堰に流して、南へ送り、南内田と、中内田へ開田を行った。これが八間長者屋敷に住んだ、八間長者である。」（片丘村史）

永享五年（二四三三）「大和守と心（信）源」の兄弟は、鉢伏権現に、八軸納経の石塔を奉納して、雨乞いを祈っている。（請雨は水田

用水のために行う。)

波田の波多腰姓は平成二十五年現在で九十世帯余。江戸時代は興(腰)姓「近世に下波田村の庄屋、組頭の家系であった」ことは事実である。

現在内田及び中山(埴原)に同姓は無い。『片丘村誌』によれば「天文十九年(一五五〇)ころ、八間城主波多山城守が武田氏に降参し、洗馬の三村氏の取りなしで、天正三年(一五七五)畠庄司腰山城守として、内田から、波田郷を支配した」としている。

▼しかし波田に残る史料で見える限り、現在の波多腰氏が内田から移った伝承はなく、古くから波田に山林や田畑を多く所有する素封家であった。

十二 結城陣番帳の波多殿

▼永享十一年(一四三九)源信盛は波多郷慈眼山若澤寺へ、大檀那で梵鐘を奉納している。

その翌年、永享十二年(一四四〇)信濃守護の小笠原政康は、將軍足利義教から、関東の結城氏朝の乱を鎮定させるため、全追討軍の陣中奉行を命じられ、信濃武將は夜番を割り当てられた『結城陣番帳』である「一九番波多殿、同名中殿」とある。同名中は波多の地侍衆です。

なをこの『陣番帳』には、竹田殿、大池殿、小坂殿などかつての波多殿領内から村地頭が出陣しており、内田埴原も失い波多氏は弱体化した。

一三 内田埴原の領主の交代

鎌倉執権北条氏は、滅亡して所領は没収された。室町時代になると新補地頭の所領まで取り上げられている。内田と埴原の地頭波多判官代跡の所領は『諏訪上社の御符札之古書』によると、寛正三年(一四六二)には埴原と中内田の領主は波多判官大夫跡の波多政盛から、むらいしものまこと村井伴政知に替り、南内田は府中の和田筑前守雅基が領主に、北内田の領主には平瀬民部太輔国知に変わっている。

上社は旧例により、元地頭であった、波多判官代跡の波多越後守政盛に祭事の頭役のみを指名している。

一方波多郷は、平安末から村上系源姓波田氏が領主であったが、

源信盛が永享一三年（一四四一）ころ亡くなり、家老が家督を奪つたといわれる。

一四 若澤寺施主に平朝臣六翁盛高

▼村上系源姓波田氏が没落したあと、一八年経って、若澤寺参

道脇の巨石板碑に「阿弥陀三尊梵字の種子、天蓋、蓮華座を菓研

掘り」「施主平朝臣六翁沙弥盛高」「長祿二年（一四五八）五月二十八日」とある。

『波多村誌』（明治九年編）若澤寺拜殿鰐口銘「信濃国捧庄畑郷

慈眼山若澤寺 奉千手観世音 施主平朝臣六翁 長祿二年（一四五八）」とある。北安曇郡から平姓仁科氏が、僅かの間所領とした。

『西光寺絵図』（上波田阿弥陀堂所蔵）の書き込みに「阿弥陀堂

文正元年（一四六六）五月源政盛建立」とある。これは元内田埴

原地頭、波多判官太夫跡、波多越後守政盛が先祖の氏寺へ寄進しており、すでに平盛高は見られない。

一五 櫛木家臣団が西光寺檀家に

櫛木市正くしまいちのかみかずとし一俊は、寛正三年（一四六二）に小笠原持長の命で

畑再興寺城と、波田山城を築いた。「山城東西へ二一間、南北二〇間」「村ノ内平城東西へ五〇間、南北へ三〇間、土手一重、堀は乾ら堀」（堀本百瀬文書）

▼櫛木家臣は、寛正く永正（一四六〇〜一五二〇）の六〇年間、西光寺を菩提寺としていたらしい。

『西光寺絵図』に墓所氏名がある。

櫛木紀伊守政盛家臣併び一門

源太左衛門信盛墓 穂刈傳三郎

丸山喜左衛門 藤本喜三郎

平林喜多右衛門 太田信房

藤沢佐太郎 浅田周教

倉澤數馬 平波市郎太

安藤嘉七 川澄龜千代

大槻刑部 百瀬新九郎

塩原民部 百瀬豊前

村上仲綱 百瀬吉兵衛

太田傳九郎 百瀬宗左衛門

中島(野)彦左 大輪六左衛門

(墓は後年、いずれも他へ移り申し候)

1 上波田へ熊野権現を勧請

『信州筑摩郡畑里代 御古代神子記』

(中波田古城 蒲生秀九郎家写本)

熊野三所大権現 願主畑里中

永正一七年(一五二〇)弥生廿八日 神主 森井

千太夫藤原利久 畠城跡青木原へ紀州牟婁郡有馬より勧請

(波多信濃守源信成跡)

「棟札に」姥滝西水沢野館古波多右京殿。城主紀伊政盛、大野田五

郎、西牧入道、西村源重郎、畠山城主波田式部政勝、堀野城主百瀬

助右衛門源長昭、藤本喜代貫、丸山喜左衛門、小穴三郎左衛門、大

輪六左衛門、茂呂源左衛門、西原定七、藤沢仁太郎、塩原忠太、安

藤嘉七入道、倉沢久六郎、百瀬角太、大槻郡大夫、百瀬吉兵衛、川

澄龜千代入道、太田傳九郎、穂刈(後に武居)新左衛門、村上綱右

衛門、深澤喜兵衛、平林喜多右衛門、太田信近、加波(蒲生)新五

兵衛、斎藤但馬、奥原権之進、浪主輿山城入道、浪主僧藩大内小松

之丞。

2 百瀬長昭が中上手に梓川寺

里の坊西光寺の塔頭周防山梓寺は、開祖道祐にて五代目の道鐫和

尚代応仁元年(一四六七)に開基者村上氏の由縁によって、堀ノ城

主だった、畑郷莊官百瀬長昭の指揮で、梓川寺と号し、浄土真宗

の寺として、三溝中上手に移したと伝えられる。

西光寺は無量山を、村上氏の通し字「義」を用いて「義応山」に改めた。『瀧東百瀬家文書』

百瀬長昭の戒名は「乗貞阿闍梨」とあり、西光寺からもらった法名。没年は明応七年（一四九八）二月二十一日。

瀧東嶋には大永三年（一五二三）長憲代下る。

十六 元寺場は鎌倉時代墓地に

『元寺場発掘調査』は、考古学者の原明芳、奈良立歴史館課長と市川隆之、県埋蔵文化センター主任研究員を中心にして二年かけて、標高二二五〇メートルの元寺場遺跡を行った。トレンチ調査で判ったのは、平安後期の十世紀末から十一世紀初頭に始まった山岳寺院だが、十三世紀（鎌倉時代）からは使用されず、偶然発見されたのは、古瀬戸の瓶子と四耳壺二個で、火葬骨が入れてあった。

1 室町期に白山修験道さかん

鎌倉時代には、放棄された元寺場が、再び大拡張され、新たな造

成工事が行なわれ、古代の基壇の回りを、中世になり拡大造成し、

一万二千坪（三九五〇〇平方メートル）にも境内が広くなり、大きな建物が複数建てられて、人が多く集まって、活発な宗教活動が行われていた。その動きは十五世紀（室町）から十六世紀末（戦国末）まで続いている。中央部にはきちんと礎石が置かれた、五間堂の基壇があり、出土品は「薬茶碗、青磁碗、天目茶碗、茶ノ湯風炉、すり鉢、内耳鍋、五輪塔の一部」、中国の明銭「洪武通宝（一三六八）」、「永樂通宝（一四〇八）」。

湧水池は3ヶ所。斜面に小平地が多く残る。

江戸初期の寛文十年（一六七〇）の『黒川山論絵図』に水沢谷の若澤寺の建物とは離れた、山の奥の方に、大きいお堂が描かれている。多分元寺場の堂である。元寺場での活動は一六世紀の戦国末までだが、五間堂は、江戸初期まで残っていたようだ。

元文三年（一七三八）の『若澤寺什物帳』に「峯白山権現堂 十
一面観音一休」とある。

元寺場の五間堂には、比叡山延暦寺の山王七社の一つで客人神と

まろつどがみ

いわれている、白山妙理大権現の白山菊理姫命とその本地の十一面観世音が安置されていた。

元寺場五間堂跡より、白山の頂上（二三七メートル）の白山社まで、尾根状に、一本の参道が作られている。こうした形態から考へ、元寺場は、古くは白山修験道の道場であつたと思われる。

2 江戸時代まで五間堂残る

江戸中期『若澤寺什物帳』（宝暦九年（一七五九）に二間四方権現堂但し大板ぶき」とある。「新古什物帳」（安永七年（一七七八）には「薬師殿内十一面観音」とあり、「峯白山観音之社」は別の祠になつている。

元寺場においては室町（十五世紀）から戦国末（十六世紀）まで、天台宗山王七社の一つ、白山妙理大権現の本地仏十一面観音の神仏習合修験や、山王十一社の一社「大山おおやま昨ま之神の垂迹おとよ伝、聖観音」への祈禱が行われ「スサノオ命は不動明王の本地」など、山岳修験場であつた。

一方水沢谷の若澤寺は、中世戸隠修験であつたが、江戸初期に、新義真言智山派になり、宗教法式が変わり、古代の神仏習合から、民衆の善男善女の参詣する現世利益型の寺になつた。

3 水沢大天狗は山伏行者

▼江戸時代の道中記作家十返舎一九の『信州水澤観音利益』という絵草紙の物語に登場する「水澤山大天狗」には「魔所」として、白山ヶ峯、五輪ヶ窪、古へ寺場は「天狗の棲み家だ」といわれ、昔は修験者（山伏）の道場で、俗人の入山を禁忌した行場で「女人禁制」の結界があつた。

井出道貞著『信濃奇勝録』は「水沢山に夜間上空に炎光が見え、沢水が急に止まった現象を、天狗の為せる業なり」と書いている。水沢元寺場の修験の行場は、姥滝、黒川山の天狗岩、差し切り峡、鉢盛の滝、荒倉山鳴神、清水寺の周辺などが、白山修験の行場の名残だろうか。

4 加賀の白山信仰とは

白山信仰は、加賀の白山しらやまひめ比咩神社を泰澄たいちょうという僧が、勅命で開山した。白山修験道は平安初期に成立、天安二年（八五八）には、比叡山延暦寺に白山神が勧請され、白山妙理大権現ひえは日吉神社の山王七社の客人宮まろうびとみやである。

養老元年（717）白山の山上で祈祷していた秦澄の前に、九頭くづ竜神りゅうじんとイザナミノ命、十一面観音があらわれたという、河水の神、女神信仰です。

十七 戦国時代に荒廃した若澤寺

▼『若澤寺の住寺隆仁記』には

「天文のころ（一五三二―一五五四）寺領減少して、諸堂は破壊退転同様にあいなり、当時の寺場へ下り候ところ、甲州武田家より寺領のため、永合わせ十一貫百五十文下されおき、山林も東は木ノ小口、西は山王、いずれも畝切り、そのほか寺中屋敷一ヶ所十軒分、領し候」とある。

戦国期若澤寺の建造物は、荒廃したままで、水沢谷に残っていたが、修繕できず、上波田の里の坊西光寺の方へ下って住んだらしい。

1 波田殿の敗北で無施主に

天文十七年（一五四八）に林城主小笠原長時は、甲州から攻め込んだ戦国大名の武田晴信に大敗し、波田城主で長時旗本だった波田数馬は、浪々の身となる。若澤寺は有力檀那を失い、山中の奥ノ院は屋根替えもままならず、寺の本尊なども、西光寺へ移していたらしい。

天正二年（一五七四）に越前住経聖が阿弥陀堂横へエンマ王碑を建て、翌三年（一五七五）紀州僧高圓も仁王門前へ供養碑を建てている。

2 武田勝頼の寺領寄進

▼武田勝頼は、天正五年（一五七七）に寺領寄進をしている。「観音堂ならびに寺中造営 疎略なきまで勤仕し、武田家の武運長久の祈

願にも丹精をこらされべし」と占領から二十九年目の安堵状です。

若澤寺隆仁記に「寺中屋敷、寺家町北側門前十軒分」とあり、この時代までは、西光寺も若澤寺も両院が同一の寺とみなされていた。

3 元水沢からつきがね堂へ引く

▼『文献資料集1』の「水沢寺のわけ」（波多腰丸本文書）

「文禄三年（一五九四）六月一日 元水沢より、つきがね堂の場所へ引くなり」とある。水沢谷の若澤寺が荒れて、元水沢（里ノ坊西光寺）の所へ移っていたか。

文禄三年になり奥ノ院（つきがね堂）の場所へ返った。次の年（文禄四年）山中の法久寺を下波田原村へ移している。

また『善光寺道名所図会』に次の記録がのっている。

「拝殿鰐口文字 宝徳二年（一四五〇）六月一日

院主為 宥聖 信兼 奉施入鰐口讚岐守」

「片方尔 若澤寺鰐口 細野七右衛門 立願成就処敬白

文禄三年（一五九九）申午四月八日」

この鰐口は、天正十年（一五八二）に小笠原貞慶の報復を受け、滅亡した、西牧氏の廢物を再利用している。

4 小笠原貞慶の寺領寄進

天正十年（一五八二）には、武田氏が織田信長に滅ぼされ、同年七月に小笠原貞慶は、信長が部下の明智光秀により殺され、信州が混乱した機会に乗じて、旧家臣らに推戴され、松本城を回復、安筑両郡の主となるや、貞慶は、早速同年八月には、若澤寺に武田氏の寄進を上回る寺領と門前十軒分を増した。貞慶は、この年、西牧氏を攻めて、一族を滅亡させたといわれている。

天正十八年（一五九〇）に石川数正が領主時代の太閤檢地による御朱印には、若澤寺領 十五石、西行（光寺領）五石、浄（常）泉寺領 五石が別々にのっており、分離独立したらしい。

▼天正十二年（一五四八）中波田に諏訪神社が建てられており、下波田村が独自の祭礼を行い、特産の麻取引のため「三日市場」ができた。

一八 西光寺が若澤寺預けに

義心山西光寺は、天文二十一年（一五五二）に柏鷹正庭和尚が、水上に、禅宗の常泉寺を開山した頃から、有力な檀家が常泉寺と中上手安養寺とに移った。原因は大檀那波田殿の滅亡によって、寺存立が困難になった。『西光寺絵図』によれば「元禄年中（一六八八）一七〇三）庄屋源右衛門この寺をつぶして、若澤寺へお預けとなり、元禄の末ころに、阿弥陀堂、仁王門と地藏堂を熊野権現南に移し、跡は破壊退転の始末なり」とある。

一九 新義真言の智積院末に

若澤寺は、天台系の白山権現信仰や、戸隠修験道と結びついた、神仏習合の祈願寺として続いてきたが、慶安二年（一六四九）徳川家光から、寺領十石の御朱印状を受けてからは、幕府の意向に従い、それまでの無檀寺から、八十軒の檀家を持ち、キリシタン宗禁制の幕府政策の寺請け制度を受け容れ、寺の存続をはかった。

また延宝四年（一六七〇）には、住寺隆仁代に、新義真言宗智山派の

法流に加わり、本山京都智積院の僧正運徹から「法流認可」を得た。

こうして江戸中期の元文三年（一七三三）の『若澤寺什物帳』（波多腰丸本家文書）には

▼客殿（護摩堂）に真言密教の中心仏 大日如来とその化仏で、本尊の不動明王を中央に、両大師（弘法大師空海像と興教大師覺鑊像）、
両界曼荼羅（金剛界、胎蔵界）、まんだら薬師如来、真言八祖像、十二天像、十三仏、大日教などと荘厳を整えております。

▼観音堂には、本尊千手観世音、聖観世音、千手観音前立、如意輪観音、同脇立（観音菩薩、勢至菩薩）四天王、飛行釵、鰐口、鐘など

▼薬師堂には、本尊薬師如来、坂上田村麿の東帯坐像

▼峯白山権現堂には、十一面観音

▼馬飼小屋

▼鐘楼と梵鐘

▼庫裏

1 「長禄二年に山奥から下る」は誤り

水野忠恒松本藩主が享保七年（一七二二）から、三年かけて、家臣の鈴木武重と三井弘篤に調査させて上梓した『信府統記』には、次のよう若澤寺について書かれています。

「昔ハ今ノ地ヨリ二十七八町程山奥ニアリシガ長禄二年（一四五八）今ノ地ニ移セリ」としている。

元寺場の発掘により、この説は覆くつがえされ、室町時代から戦国までの元寺場には、さかんに人が出入りし、宗教活動がされていたことが判明して居ます。

水沢の溪谷に、奥ノ院若澤寺が建立されたのは鎌倉時代です。元寺場が最初に廃棄され、墓地化したころ、山裾の上波田寺家に里ノ坊西光寺が建立され、仁王門から一八丁奥に若澤寺が、村上系源姓波多氏により建てられたことは、発掘品や現存する仏像などの製作年代でも明らかである。『信府統記』を参考にして編集したらしい。『信濃奇勝録』にも「古くは三十町余山の上であり、長禄二年今の地に移し……」と引用し、前書の誤りが正されていないが、

最初の不十分な調査で、あて推量に書かれた文献が、後世まで、尾を引く、悪い前例である。

2 住職栄運の英知と人徳

江戸初期まで、無檀家の寺だった若澤寺は、檀家わずか八十軒であつたが、寛保元年（一七四一）ころは、所有田畑からの、小作料収納は、預かり分の西光寺屋敷をふくめ、四十三石四斗あり、無税の朱印地なので、寺の財政は裕福だった。

後世に信濃日光と讃えられた、大伽藍を完成させるまでには、歴代住職たちは絶妙なイメージアップ戦略をとった。

例えば、流行作家十返舎一九の絵草紙本に、若澤寺を舞台とする物語を創作出版させたことで、全国に知られた。

それより五十年前の、住職栄運法印が行った、国中初法談会は、全信州の談林から、学僧約百人を若澤寺に集めて、旧暦二月十五日から三月十五日まで一ヶ月間、毎日食事を提供宿泊させて、新義真言の教学と式法を学習させた。論議聴聞の群集は何万人も訪れた。

榮運は上波田、湊東、赤松、中波田、下波田の集会場へ、檀家外の村人を集め、全員から白米と茶代銭を拠出してもらおう「せとぎんあひ施斉組合」の結成を成功させ、法談中に使う飯米と茶代に事欠かさない算段が立った。これは地域全体で、水沢観音を支える組織で、その後の観音堂新築の寄付集めにも役立った。

弘化三年（一八四五）に住職堯朝は中堂救世殿と田村殿屋根を赤銅瓦に葺き替えの勸化（寄付）を行い、檀家外の村人からの寄付金が、予想を超えて多かつたといわれ、この堯朝の時代には、待望の談林所免許が牛伏寺、仏法寺の協力で本山から、許されています。天保四年（一八三三）には、若澤寺の護摩壇と大壇、円壇の新調にも中下波田村の「光明真言講中」五〇人が寄付している。

二十. 常和泉守の菩提寺は盛泉寺

波田水上の曹洞宗盛泉寺は、明治初年に廃寺となつた真言宗旧若澤寺から多くの仏像や観音堂を預かり保管しています。常（盛）泉寺の創建は、天文二十一年（一五五二）に柏鷹正庭和尚が開基して

いる。中信へ甲州から攻め込んだ戦国大名の武田晴信と信濃守護小笠原長時は天文一七年（一五四八）に塩尻峠で合戦。小笠原方は大敗している。波田城主で西光寺を菩提寺としていた、旗本衆波田数馬（櫛木氏の末裔）もこの合戦で討ち死にし、天文二十二年（一五五二）には深志城代の日向大和守是吉これよしにより波田山城と平館城（西光寺城）は取りこわされたといわれる。敗戦後は波田郷内に居た旧小笠原家士の浪人は、帰農して、上波田水上へ曹洞宗の常泉寺が開かれたため、菩提寺にするものが多かつた。

同寺の開山は神林城主の常和泉守晴永つねずみといわれている。この常澄つねずみ氏の祖先は、鎌倉時代の名僧として知られる「法燈円明国師覚心ほうとうえんみんこうくくしん」の出身氏族である。波田古城の百瀬右近の墓碑に「妻ハ常野和泉守女」とある。開基を正庭和尚としているが、実は天文五年（一五三六）に正庭の師で小岩岳青源寺の蘭恕和尚が初代といわれる。旧小笠原家士の菩提寺です。

1 盛泉寺位牌堂に開山の氏人

開山常和泉守晴永

左開山 安藤重郎左衛門嘉平治

右開山 倉沢久右衛門

右開山 百瀬長太夫

深澤六兵衛

左開山 平林与右衛門

大月九郎右衛門

準開山 和田村萩原与三右衛門

壇 中 塩原左衛門

百瀬平治右衛門

大木治右衛門

渡辺太右衛門

平波吉良治

鎌倉甚右衛門

大月藤七

相沢政右衛門 大池治右衛門

平林仲右衛門 春宮吉兵衛

以上は元禄十一年（一七〇二）までの人名『安藤家文書』

盛泉寺の寺紋は「三階菱」を用いており、小笠原氏ゆかりの寺院であることが示されている。

古代豪族の常澄氏は、松本市神林寺家地区の福応寺の境内が旧屋形つねずみの跡とされます。福応寺の前身は穂屋野山ほやのさん、曼荼羅寺まんだらじといわれ、江戸時代には、福応寺は波田の若澤寺の末寺であった。

二十一・若澤寺の丁石と施主名

水沢谷に大伽藍が建てられ「信濃日光」と呼ばれた慈眼山若澤寺まで、里の坊西光寺仁王門を初丁に十七本の丁石が、一丁毎にある。建立は江戸初期寛永十二年（一六三五）六月吉日で、施主は地元の有力者とみられるが、現存する完品は六本である。

四丁目 赤松勘衛門

北（藤）沢久五郎

古畑弥兵衛

西原定右衛門

丸山作右衛門

大月市郎右衛門

松田太兵衛

和田萩原権左衛門

深沢権九郎

大月長作右衛門

中島茂右衛門

松田喜左衛門

平林長四郎

大関金平

村上半三郎

村上文三郎

古畑金三郎

大月仁右衛門

上村喜平治

十丁目 百瀬平左衛門

十三丁目 塩原忠衛門

十四丁目 百瀬弥三左衛門

十五丁目 穂刈伊左衛門

十六丁目 加藤四郎兵衛

裏参道の一基は享保二十年（一七三五）二月二十八日の

十二丁目 下波多村興孫左衛門

二十二 波田下郷の諏訪神社と春日氏

波田下郷（中下波田）の諏訪神社は古くは、中沢神の洞に「水神」の祠で祀られていたが、洪水で流れ、現在地へは天正十二年（一五八四）諏訪大明神本殿を造立、神主森井仙太夫広高、祭主春日淡路守、産子下郷中。寛政四年（一七九二）本殿を名工柴宮長左衛門により、建て替えている。

慶長一八年（一六一三）小笠原秀政松本城へ再帰。春日淡路は波田淡路屋敷で下波田へ三日市場を開き、麻取引に運上（税）をとる。

飛騨国主三木秀綱が、天正十三年（一五八五）に亡ぼされたが、秀綱奥方が、淡路守の娘だった縁故で、波田へ飛騨越中の浪人が多く入り、中波田上下新田を開拓した。

主な氏は、高山氏、大関氏、関口氏、野村氏、荒倉氏、上村氏、岩崎氏、古田氏。和泉氏は中山和泉から。

上波田の渡辺氏、麻田氏、三溝の大嶋氏は三木秀綱家臣で浪人。

春日淡路家臣は古林氏、惣洞氏。木曾氏家臣は小林氏と村山氏。甲

州武田浪人は上波田の大久保氏、大木氏、と原村の藤沢氏、相沢氏、

鎌倉氏。仁科浪人松沢氏。今川浪人は横町の氷川氏。春宮氏は諏訪

下社五官の内伊那幅村の人。上原氏は同行兎海渡住。

下波田川手氏、神田氏は松本藩水野家浪人。

これら戦国末の浪人によって、未開地が開拓され、それぞれが三溝安養寺、中波田盛泉寺、上波田若澤寺の檀徒となった。

文禄四年（一五九五）には、水沢若澤寺から末寺の法久寺が、原村（中波田）へ移され、檀家の菩提寺であり、また手習所だった。

波田下三溝に弘治三年（一五五七）の年号のある『木造聖観音立

像」を持つ旧西竜山真光寺跡の小堂がある。かつては安樂寺末といわれ、新村の豪族古畑伊賀守と奥山城守が建立したと伝えられる。

下三溝には、上條氏、原田氏、小林氏、松下氏、松田氏、大池氏、百瀬氏、杉山氏、手塚氏、萩原氏、塚田氏、古畑氏と根石の奥氏らが古い住人で居る。

安養寺は、中上手より水害後の宝暦年代（一七六一）に移転した。

二十三 信濃日光を仕上げた栄豊

享和元年（一八〇一）から文化四年（一八〇七）までの六年間に、若澤寺住職の栄豊法印は、信濃日光と言われるほど壮麗な観音堂とそれへ登る広い階段の上へ清水寺の舞台を模して、石垣に架設、入口には雄鳥羽の滝と弁財天池、善女竜王祠、みたらしを作り上げた。

新たに観音堂の拝殿と廻廊、鐘楼、御供所、あかの井、塀、内門、木造大舞台と階段の階きざしをはじめ、一切経蔵、田村堂の覆屋、熊野三社、金毘羅宮、西国二十三番観音霊場めぐりの石仏蔵（三十三体）、石造の宝篋印塔などを一度につくりあげている。

こうした若澤寺の美しい様子は、新築間もない文化十一年（一八一四）に、松本本町の書店主高見甚左衛門の招きで、江戸の旅行作家十返舎一九が来松、若澤寺で一九と花垣（版木師）は三泊四日の間に取材して、文政二年（一八一九）に出版した。

その絵入り草紙『水澤観音利益、雑食橋由来』という読み本の序文で「昔々天平勝宝の頃ほい、行基菩薩の開基し給ふとかや、忍ぶ杉の名今に朽ちず、雄鳥羽の滝絶えずして、五却不滅の石の宝塔なめらかに、田村將軍の御霊屋いと尊し。されば密教の流布し給うことは、救世殿の莊嚴にあらわれ、古鐘の銘に明らかなれば、守敏僧都も弓を伏せ、使い鬼神も鉾を捨てて渴仰すべしと、末世の衆生もここに人我を醒すべし」と書いています。

1 山林の売却で観音堂作る

若澤寺は、繰り返し檀家総代や近隣七ヶ寺と本山へ、訴訟を行っています。そのほとんどが、寺有林立木伐採をめぐる争いが原因。

天明八年（一七八八）寺住職が、寺有林を無断で伐採売却した一

件について、檀家総代が訴訟し、その後和談しております。

寛政二年（一七九〇）と寛政七年（一七九五）の二回も、近隣の七ヶ寺が若澤寺を本山へ訴えています。これに対し、若澤寺側は、近隣七ヶ寺を「不如法の儀」として本山へ、訴訟を起こしています。

争いの内容は、若澤寺が、山林を切り荒らして、売上代金を仏法の規律を破り「女性を囲う」などで、金銭を浪費していると、筆を極めて非難し、若澤寺側も七ヶ寺が宗門の規律を守らず、十分な勉強をしていない、などと激しく文書で応酬していますが、本山の江戸役寺も、寺社奉行所も両者の言い分に、煮え切らない対応。松本藩も徳川將軍の御朱印寺をはばかって手が下せない状態。

こうした情勢に、若澤寺の住職栄豊は、檀家総代、七ヶ寺の反対や非難には、あえて耳を貸すことなしに、山林伐採と売却を進めて、目的の、寺院建築造営費用に充当して「信濃日光」を完成させたとみられる。

水沢観音堂の造営記録は残っていないが、八十軒の檀家には、かなり寄付は重荷だったらしい。有産者のそろっていた腰一統が金五

十両、下波田の両百瀬氏が二十両というのが大口寄付者であるが、若澤寺は平均的な奉加（寄付）では、松本平一円や、木曾、大町までふくめても、財源は充足できなかったと思う。したがって短期間に建設を進めるためには、立木の売却は、やむ得なかったらしい。

2 出版物に紹介された水澤観音

十辺舎一九の絵入り草紙本、嘉永二年（一八四八）に名古屋で発行された『善光寺道名所図会』に、若澤寺一山と雑食橋が木版刷りの絵図で紹介されて、信濃水澤観音は、全国的に有名になった。

「若澤寺の縁日は、毎月一八日にて、善男善女の参詣が多かった。ことに六月一八日と七月九日の両日は、松本平は更なり、遠く他郡、他国から参詣する者おびただしく、実に信濃の大寺にして、天下の古刹なり」と昔を知る、古老は明治になって、往時を回顧して書いています。

3 参拝者を寺に宿泊させる

若澤寺跡の発掘調査で判ったのは、旧庫裏と、勝手場の付近や斜面から、江戸時代末期の食器や酒器、摺鉢、台所の炊事用の道具など、かなりおおぜいのために使った器物が出てきており、遠方から参詣に訪れた旅人は、若澤寺の庫裏の棟続きにみられる、長屋風の宿舎へ泊って、寺で食事を出してもらい、宿坊にしていたようである。湯殿もあった。

若澤寺は宝暦九年（一七五九）栄運代の什物帳（波多腰丸八家文書）をみても、建物の棟数は十三棟あり、惣坪数は三百二十七坪余もあるのだ、一夜に数十人の宿泊客が寝る部屋は十分にあった。

また宝暦四年（一七五四）の初法談会では、百人の所化衆しよけしやうと指導者の高僧や手伝いなどが食事のできる、調理場施設、宿泊施設としても十分役割をはたせる寺院であった。

4 門前町の賑わいは

江戸後期の、水沢観音は、毎月十八日の縁日や、旧暦六月十八日

と七月九日は、他郡、他国からの参詣者多くあり、また三十年に一度の水沢観音の御開帳は、七月五日から二十日まで盛大に開かれていた。しかし地元上波田には、門前町を表す縁起物や土産品の商店、茶店の伝承もなく、旅籠はたごや院坊の形跡もない。僅かに「線香屋」、ひしゃくや「柄杓屋」の屋号があるだけであり、縁日だけ屋台店の香具師やしが集まったのであろうか。

二十四 廃仏毀釈で幻の寺院に

千二百年の歴史を誇った、信濃日光若澤寺は、明治元年（一八六八）明治政府から「神仏分離令」が発令されると、全国に廃仏毀釈が忽ち広がった。殊に、松本藩主戸田光則は、明治二年自らの菩提寺弥勒院と墓所の前山寺を廃寺して、神葬祭に改宗し、家中に改典係を置いて、僧侶の還俗帰農と檀信徒の神葬祭への改典を強制し、無檀家になった寺院は容赦なく廃寺させている。

若澤寺とその塔頭の西光寺、法久寺及び真言宗下三溝真光寺へ正式に「破却仰せ付けられ候」との「布令」は、松本藩より版籍を引

き継いだ筑摩県の参事永山盛輝の命令で、明治五年（一八七二）壬申九月一九日のことであった。この時松筑地区の対象寺院は真言宗が主であったが、後には他宗も廃寺になった。

若澤寺の建物その他家財、道具の競売は、明治六年（一八七三）

七月から八月に上波田村の戸長、副戸長、学校世話役らによつて実施され、売上代金を学校充備金として、村が預かっている。尚建物の内、庫裏（七間×八間）と勝手（三間×十間）は帰農した僧侶の水澤堯賢と水澤芬の兩人に居所として与え、宅地と田畑も払い下げしている。『浅田信一郎家・川澄高教家文書』

また本尊の不動明王木像はじめ仏像六十八体と仏具十一個は、上

波田村禅宗盛泉寺へ預けている。『上波田浅田信一郎家文書』

1 旧藩士の失業対策

明治七年（一八七四）明治政府は、廃寺だけでなく、神社と寺院の「朱印地」はすべて上知（あげち 国有化）しています。ことに田畑は廃藩で禄を失った旧藩士への還禄債券と引き換えに、社寺から上知し

た田畑を交換で払い下げている。廃仏毀釈は明治政府が、士族の失業対策に、上知した土地を支給する謀略であった。

2 売却代金は学校資金に

徳川幕府は、全国の仏教寺院を寺請制という民衆統治の末端に組み込んで利用したが、明治維新は、幕藩封建制度の根幹にあった、寺院勢力を一掃して、近代官僚政府を樹立し、庶民教育の場とされていた寺子屋を、学校教育制度に組み入れるため、廃寺で得た財源を学校開設資金に充当することをを行った。

3 寺院は封建制の遺物視

廃仏毀釈が、当時の民衆から、強い抵抗もなく、割合スムーズに進んだ理由は、仏教は古い徳川封建制度の遺物という認識が民衆の間に広くあったためと思われる。明治初期に「ちよんまげ頭を叩いてみれば、いんじやんこそく 因循姑息のおとがする」、「さん切り頭を叩いてみれば、文明開化の音がする」の歌が流行した。

明治初めには、欧米の近代文明が、旧制度の温存を許さない、開明的な雰囲気の中で、廃仏毀釈と神社の上知、身分制（士農工商）の崩壊が進んだ時勢であったから、抵抗できず流された。それでも当時の村役人は、若澤寺の仏像や重要な仏具を盛泉寺へ預けて守つた見識は、中国の紅衛兵や、アフガンのタリバンとは違って立派な文化財保護を行ったと言えるよう。

二十五 若澤寺の旧檀家名前

◇上波田村（十八名）

孫藏、利八、与五郎、半之介、市兵衛、惣七、利兵衛、
此右衛門、孫之丞、次左衛門、由右衛門、忠左衛門、
清之丞、三郎兵衛、植左衛門、忠七、平八、沖右衛門

◇中波田村（四十七名）

文右衛門、鶴太郎、伊八、与市右衛門、彦次郎、
寛野右衛門、糸右衛門、六左衛門、常人、傳三郎、
孫藏、七郎兵衛、伴藏、利左衛門、幸助、友四郎、

鶴藏、定兵衛、小八、久藏、門三郎、左五之、重内、

源藏、志兵衛、助右衛門、久四郎、惣太朗、甚三郎、

亀重、市左衛門、清介、長左衛門、伊之助、松右衛門、

新平、浅左衛門、次助、磯右衛門、与五右衛門、権次郎、

忠五郎、要藏、定彦、儀左衛門、喜代人、伴右衛門

◇下波田村（八名）

此右衛門、藤次郎、松兵衛、太十、勝弥、惣右衛門、

源十郎、平兵衛

◇南新村（三名）

傳之助、小文次、惣次郎

平成二十五年六月

(二〇一三)

(講演) 執筆

百瀬光信

印字化 波多腰英文